令　和　４　年　１　０　月
法務省矯正局成人矯正課
矯正研修所効果検証センター

【概要】

平成 28 年度に改訂した薬物依存離脱指導の標準プログラム[1]の指導効果を検証するため、同指導対象者のプログラム受講による薬物等に対する心理尺度得点の変化に関する調査（調査１）及び再犯追跡調査（調査２）を実施した。調査１では、標準プログラムの中で最も専門的・体系的な専門プログラムを取り上げ、新たに設定された指導目標の達成状況と受講効果を確認した。その上で、調査２では、標準プログラム改訂後のプログラム受講率及び同指導対象者全体の再犯率について、プログラム改訂前の体制と比較し、改訂に伴う変化等を確認した。

１　調査１：専門プログラムの受講による心理尺度得点の変化に関する調査

（１）対象者

平成 30 年 10 月から令和２年 11 月までの間に刑事施設（男子施設 19 庁、女子施設６庁）に在所し、薬物依存離脱指導の専門プログラムの受講の必要性が認められた者を無作為に受講群と比較対照（受講待機）群に割り振り、調査への同意がなかった者（54 名）及び欠損値が多いなど回答に問題があった者（33 名）を除外した 439 名（受講群：225 名と比較対照群：214 名）を分析対象とした。

（２）調査方法

受講群は専門プログラムの受講前後に、比較対照群は受講群と同時期に、薬物等に対する心理尺度得点の変化を測定する自記式質問紙調査を２回実施した。質問紙調査においては、専門プログラムの指導目標に関連する概念を測定する８つの心理尺度（表１）を使用した[2]。

---

[1] 従来１種類だった標準プログラムについて、受講対象者全員に実施する「必修プログラム」、専門的・体系的な指導を行う「専門プログラム」、民間自助団体によるミーティング等補完的に実施する「選択プログラム」の３種に複線化し、受刑者個々の再犯リスクや問題性、刑期の長さ等に応じてプログラムを組み合わせて実施できるように改訂したもの。

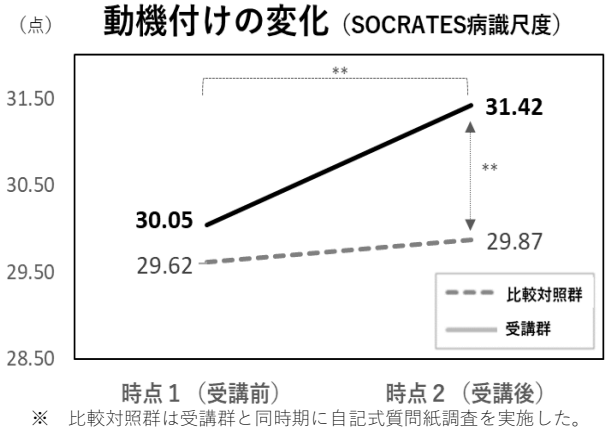
[2] いずれの心理尺度も、得点が高いほど望ましい態度等が強いと解釈される。

表１　調査に使用した心理尺度

指導目標	尺度名	概要	下位尺度	項目数	信頼性係数α
薬物依存の認識及び薬物使用に係る自分の問題点の理解	**ＳＯＣＲＡＴＥＳ－８Ｄ**（小林他、2010）	薬物依存の問題を変えたいという変化への動機付けを測る。	病識	7	0.86
			迷い	4	0.67
			実行	8	0.79
断薬への動機付けを高める	**薬物依存に対する自己効力感スケール**（森田他、2007）	薬物に対する欲求が生じたときの対処行動に関する自信を測る。	全般的自己効力感	5	0.81
			個別場面自己効力感	11	0.96
再使用に至らないための知識及びスキルを習得させる	**スキル尺度（予防）**（独自開発尺度、未発表）	薬物を再使用しないために日常生活の中で実行する予防スキルを測る。	合計	20	0.91
	スキル尺度（対処）（独自開発尺度、未発表）	薬物を使いたくなったときに、薬物を再使用しないために実行する対処スキルを測る。	合計	19	0.91
社会内においても継続的に治療及び援助等を受けることの必要性を認識させる	**援助希求尺度**（独自開発尺度、未発表）	薬物を使用しないために、継続的に治療や援助を受けるための知識と意欲、自信を測る。	合計	9	0.81

（３）結果

まず、受講群と比較対照群の対象者の属性に大きな隔たりがないことを確認するため、両群を比較した結果、統計的に有意な差は認められなかった。その上で、１回目と２回目の心理尺度得点を比較した結果、受講群の全８尺度の得点に顕著な変化があり、かつ６尺度は比較対照群の変化よりも顕著な上昇が認められた（図１）。このことから、平成 28 年度に改訂された薬物依存離脱指導の専門プログラムには、薬物を再使用しないためのスキル（スキル尺度）、継続的に治療や援助を求める態度（援助希求尺度）、薬物依存の問題を変えたいという変化への動機付け（SOCRATES）や薬物の対処行動に関する全般的な自信（全般的自己効力感尺度）を向上させる効果が見られ、同プログラムの指導目標が達成されていることが認められた。一方で、具体的な場面で薬物の欲求に対処できる自信（個別場面自己効力感尺度）と薬物依存の問題に対する心理的な迷い（SOCRATES 迷い尺度）は他に比べて受講前後の得点の変化量が小さかった。



※　比較対照群は受講群と同時期に自記式質問紙調査を実施した。
※　受講群 225 名、比較対照群 214 名、検定：分散分析（** $p < .01$）

図１　受講前後の得点変化例（一部抜粋）

また、男女別に分析した結果、男子対象者（受講群 144 名、比較対照群 136 名）については、ほとんどの尺度に受講による得点の上昇が確認された一方、女子対象者（受講群 81 名、比較対照群 78 名）については、尺度得点の上昇はあったものの、男子受刑者と比べると薬物依存の問題を変えたいという変化への動機付け（SOCRATES）や自己効力感（薬物依存に対する自己効力感尺度）に関する得点の変化量が小さかった。このことから、専門プログラムの

受講によって、男女共に、薬物依存の問題の改善につながるスキル等を身に付けられており、受講効果は認められたものの、男女により効果に差があることがうかがわれた。

２　調査２：再犯追跡調査

（１）対象者

平成 30 年 11 月から令和元年５月までの間に調査対象施設（男子施設 22 庁、女子施設６庁）から出所した薬物依存離脱指導対象者 742 名（男子 490 名、女子 252 名）。

（２）再犯の定義

本調査における出所後２年以内の再犯とは、前回刑事施設出所後から２年以内にじゃっ起され、実刑判決を受けて再び受刑する結果となった事件のうち、最も犯行日が早い薬物事件を指す。

なお、前回刑事施設を出所した日を追跡開始１日目とし、分析における「出所後１年以内」の基準日は一律に 365 日目までとし、「出所後２年以内の基準日」は一律に 730 日目までとした。

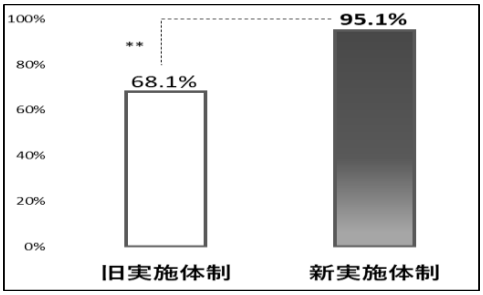
（３）調査方法

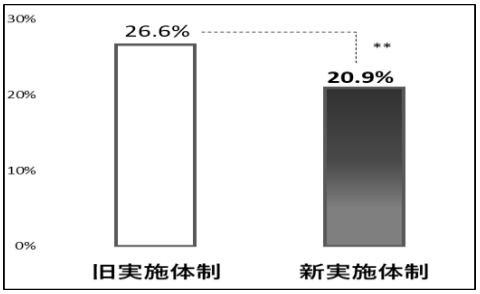
標準プログラムの改訂後（新実施体制）の再犯状況を評価するため、本調査対象者 742 名の刑事施設出所後２年以内の薬物再犯状況等について、平成 25 年に出所した薬物依存離脱指導対象者（旧実施体制）593 名と比較した。

また、本調査対象者 742 名について、薬物に対する態度と薬物再犯状況との関連について把握するため、質問紙調査に同意した者に対して、出所の２週間前をめどに質問紙調査を実施したほか、受講プログラムの組合せと薬物犯罪の再犯との関係を調査した。

（４）結果

分析の結果、調査対象者の 95.1％が少なくとも１種類の標準プログラムを受講しており、旧実施体制と比べて受講率が 27.0 ポイント向上した（図２）ほか、新実施体制における出所後２年以内の再犯率は、20.9％であり、旧実施体制の再犯率より 5.7 ポイント低かった（図３）。この結果から、新実施体制における標準プログラムの複線化は、受講率の向上に奏功したことが確認された。社会情勢や調査対象者の人数及び特性の違いなどの影響を考慮していないため断定はできないが、受講率の大幅な向上が再犯率の減少に何らか寄与している可能性が認められた。





※　旧実施体制：平成 25 年に出所した薬物依存離脱指導対象者 593 名、新実施体制：今回の追跡調査対象者 742 名

※　検定：フィッシャーの正確確率検定（２変数の関係の有無を確率的に検証する統計的手法、** $p < .01$）

図２　新旧実施体制の受講率の比較　　**図３　新旧実施体制の再犯率の比較**

また、受講プログラム別の再犯率を見ると、必修プログラム及び選択プログラムを組み合わせて受講した群の再犯率が高く、この群において、受講するプログラムの選定に改善の余地がある可能性が示唆された。

そのほか、再犯の有無に影響する出所時の薬物に対する態度について前記１で使用した心理尺度を用いて調査した結果、表２のとおり、薬物依存の問題を認識する程度（SOCRATES 病識尺度）や具体的な場面で薬物の欲求に対処できる自信（個別場面自己効力感尺度）が高まるほど再犯を抑止し、薬物依存の問題に対する心理的な迷い（SOCRATES 迷い尺度）が高まるほど再犯を促進することが示された（表２）。特に女子対象者については、個別場面自己効力感尺度が高いほど出所後１年以内及び２年以内の再犯を抑止する方向に影響していた。

表２　薬物犯罪の再犯の有無に影響する出所時の態度等

	出所後１年以内の薬物犯罪再犯					出所後２年以内の薬物犯罪再犯				
				95%信頼区間					95%信頼区間	
	B	Wald	ハザード比	下限	上限	B	Wald	ハザード比	下限	上限
SOCRATES病識	-0.10	6.04 *	0.91	0.84	0.98					
SOCRATES迷い	0.22	11.06 **	1.24	1.09	1.42	0.06	3.84 n.s.	1.06	1.00	1.13
個別場面自己効力感						-0.01	5.79 *	0.99	0.98	1.00
入所度数	0.18	19.45 **	1.19	1.10	1.29	0.13	15.39 **	1.13	1.07	1.21
男性						0.43	4.47 *	1.53	1.03	2.27
-2 対数尤度					887.48					1606.06
χ^2					28.02**					31.69**

※　検定：Cox比例ハザードモデル（変数減少法（Wald法））（n.s. $p \geqq .05$、* $p < .05$、** $p < .01$）

※　分析対象者604名、欠損による除外33名、1年以内再犯数72名、2年以内再犯数130名

※　除外された変数：必修プログラム受講、選択プログラム受講、専門プログラム受講、SOCRATES実行、全般的自己効力感、スキル尺度（予防）、スキル尺度（対処）、知識テスト、援助希求尺度

３　考察及び課題

今回の効果検証結果から、標準プログラムには、薬物依存からの離脱につながるスキルや態度を習得させる効果があることが確認された。また、薬物依存離脱指導の新実施体制における標準プログラムの複線化は、受講率の向上に寄与していることが確認され、薬物犯罪の再犯率の減少にもつながっている可能性が示唆された。このことから、標準プログラムの複線化は、施策として一定

の成果を上げていると考えられた。

他方、刑事施設における薬物依存離脱指導の対象者は問題性が大きく[3]、そうした者に対してより効果的に指導を行うためには、以下に挙げる課題の改善に取り組む必要がある。

（１）アセスメントについて

一部受講プログラムの組み合わせにより薬物の再犯率が高い類型があったところ、その背景には、受刑者の再犯リスクや問題性等に応じたプログラムの選定ができていなかった可能性が考えられる。標準プログラムの複線化による効果を一層高めるため、再犯リスクや問題性等に応じて受講プログラムが適切に選定されるよう、アセスメントの在り方について見直しを検討する必要がある。

（２）標準プログラムの内容の充実について

出所時における具体的な場面での薬物の欲求に対処する自信（個別場面自己効力感尺度）が再犯抑止に影響しており、こうした自信をプログラムで身に付けさせていくことが重要である。また、出所時までに薬物依存の問題に対する心理的な迷いを解消できない状態にある場合、再犯が促進されやすいことから、心理的な迷いや葛藤を整理させることも重要である。すなわち、長期的な再犯防止を図るため、薬物の欲求に対処する方法を習得させ、対処できるという自信を養うなど内容の充実化を図り、出所後の生活の安定や継続的な治療・支援に円滑につなげるなど、標準プログラム全体の整理・充実を検討する必要がある。

（３）男女の特性に考慮した指導及び支援体制について

男女により変化しやすい態度や受講プログラムの組合せによる再犯率、再犯の防止あるいは促進につながる要因が異なることから、男女の特性に応じた指導及び支援体制を構築することを検討する必要がある。

４　まとめ

今回の調査結果を踏まえ、より効果的な薬物依存離脱指導を実施できるようプログラムの内容を充実させていくことが必要である。その際は、先行研究において、施設内処遇でできることには限界があり、施設内処遇に出所後の治療・支援につなげる内容等を含むことが予後に影響すると指摘されている[4]ことも踏まえ、プログラムにおいて習得した知識やスキルを施設内及び社会内で実践できるよう、在所期間中から関係機関と連携した社会復帰支援を実施し、必要に応じて出所後の支援等につなげることが必要である。

---

[3] 再犯追跡調査の対象者の半数以上が犯罪傾向が進んだ者であり、約４分の１が満期釈放であった。

[4] de Andrade et al., 2018: de Andrade et al., 2019

刑事施設における薬物依存離脱指導の効果検証結果

令和４年１０月
法務省矯正局成人矯正課
矯正研修所効果検証センター

➤概要　平成２８年度にプログラムを改訂した薬物依存離脱指導の新実施体制における指導効果を検証するため、同指導対象者のプログラム受講による薬物等に対する心理尺度得点の変化に関する調査及び再犯追跡調査を実施した。

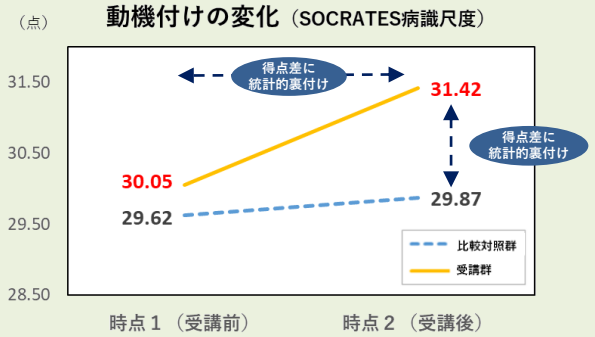
受講によって薬物依存からの離脱につながる態度等が身に付いた

心理尺度得点の変化に関する調査の概要

専門プログラム※の受講対象者439名について、受講群225名と比較対照（待機）群214名に無作為に割り振り、受講前後（比較対照群は受講群と同時期）の自記式質問紙尺度得点を比較し、プログラムの受講効果を検証した。

※　３種類（必修・専門・選択）ある標準プログラムの１つで、問題性や再使用リスク等から、より専門的・体系的な指導を受講する必要性が高い者に対して実施される全12単元の認知行動療法に基づくプログラム

専門プログラムの受講前後の得点変化の例



専門プログラムの受講効果

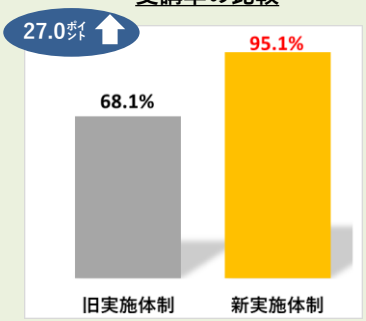
- 薬物依存の問題を変えたいという変化への動機付け ↑
- 薬物に対する欲求に対処できる自信 ↑
- 継続的に治療や援助を求める態度 ↑
- 薬物を再使用しないためのスキル ↑

上記態度やスキルの上昇が確認された。

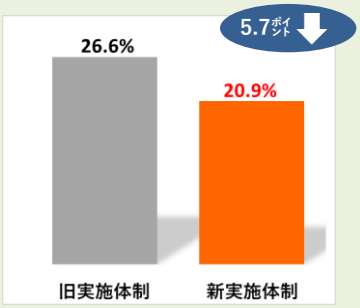
新指導目標の狙いどおりの受講効果を確認

改訂前と比べて受講率が向上し、指導対象者全体の再犯率が低下した

受講率の比較



指導対象者全体の再犯率の比較



再犯追跡調査の概要

薬物依存離脱指導対象者742名（男子490名、女子252名）について、出所後2年間の再犯状況の追跡調査を実施した。

※　再犯＝前回刑事施設出所日から2年以内にじゃっ起され、実刑判決を受けて再び受刑することになった、最も犯行日が早い薬物事件

※　旧実施体制=平成25年に出所した標準プログラム改訂前の薬物依存離脱指導対象者593名

※　新実施体制=平成30年11月から令和元年５月までの間に調査対象施設から出所した標準プログラム改訂後の薬物依存離脱指導対象者742名

新実施体制への改訂は、受講率の向上に寄与 再犯率の減少にも寄与した可能性

効果検証で明らかになった課題①：薬物依存離脱指導の更なる充実

上記２種類の調査で明らかになった課題

- 受講が再犯防止につながりにくい者もいた
- 一部プログラムの組合せに改善の余地

同指導対象者の問題性は大きく、より効果的な指導に向けた受講させるプログラムの選定方法やプログラムの内容等の改善が必要

対応策①　アセスメントの見直し

適切なプログラムの選定のためのアセスメント体制・選定基準の見直し

対応策②　プログラムの充実

プログラム全体の整理・充実
- ➤ 各種プログラムの整理・再構築
- ➤ 再犯の抑止要因・促進要因を踏まえた指導

より効果的な指導等を実施するため、関係機関との連携強化が必要

効果検証で明らかになった課題②：男女による指導効果の違い

男女ともに、スキル等の習得や再犯防止に資する一定の受講効果はあったが、下記の違いが認められた。

再犯追跡調査で明らかになった課題

男女によって、再犯防止につながるスキル等や、再犯率が比較的高い受講プログラムの組合せに違いあり

質問紙調査で明らかになった課題

女子受刑者の方が動機付け等に関する得点の変化が小さい

対応策③　女子受刑者特有の問題に対応する包括的な指導・支援体制の構築